

(2) 平成19年度地産地消優良活動表彰  
農林水産大臣賞受賞(交流促進部門)

農事組合法人「かなん」(組合長 久門明朗)の活動  
大阪府南河内郡南町大字神山 523

「なにわ伝統野菜」をアピールした農産物直売所戦略

農事組合法人「かなん」(大阪府)

【名称】

農事組合法人「かなん」(大阪府)

【代表者氏名】

久門 明朗(きゅうもん・あきろう)

【所在地】

大阪府南河内郡河南町大字神山 523

TEL: 0721-90-3911

ホームページ

[http://www.kkr.mlit.go.jp/road/michi\\_no\\_eki/contents/eki/o04\\_kanan/index.html](http://www.kkr.mlit.go.jp/road/michi_no_eki/contents/eki/o04_kanan/index.html)



地産地消の代表的流通ルートである農産物直売所は、全国で年々、数が増え、1兆円産業になると期待されている。それだけに近隣の直売所同士の競争も激化している。「道の駅かなん」を運営する農事組合法人「かなん」は、「なにわ伝統野菜」の特別プロジェクトから生まれた生産者グループが核になって誕生した。看板の「なにわ伝統野菜」を中心に、地場野菜を使った米粉パンなど、加工食品の開発に力を入れ、豊富な品ぞろえを実現している。地産地消をきめ細かく消費者にアピールし、売上を伸ばしている。伝統、文化、風土、そして何より人の和を大切にした地産地消活動が魅力となっている。

## 河南町の概要 大阪府一のなにわ伝統野菜の栽培面積

河南町は、大阪府の南東部に位置し、大阪市の中心部から 25km 圏、車で約 1 時間の距離にある。東西 6.7km、南北 7.5 キロメートルにひろがり、周囲が 37.6km、面積は 25.26 平方キロメートル。奈良県に接する葛城山地の西向斜面に位置し、金剛生駒紀泉国定公園をはじめとする豊かな自然と「近つ飛鳥風土記の丘」など古来からの人々によって培われた歴史的風土の豊かな町だ。都市化した大阪府の中では貴重な自然の残る地域である。



「道の駅かなん」は奈良から南大阪地域を通過し大阪中心部と直結する広域幹線道路、国道 309 号バイパス沿いにある。

河南町の人口・世帯数は、昭和 31 年 9 月 30 日に 9,322 人(1,783 世帯)で町制がスタートし、平成 17 年 10 月 1 日現在の国勢調査では、人口 1 万 7,545 人、6,419 世帯となっている。近年、丘陵地における住宅開発も盛んだ。大阪芸術大学、近つ飛鳥風土記の丘、近つ飛鳥博物館などの教育文化施設もある。

河南町の産業は、農業が大きな比重を占めており、ナス、キュウリなどを生産する都市近郊農業や観賞用樹(植木)の栽培が盛んだ。町の面積の過半を山林が占め、農地、水面を加えて緑地系が 4 分の 3 を占める。

特に大阪府が認証する「なにわの伝統野菜」生産面積では府内で第一位となっている。

### ・農業構造 (単位: ha)

農家戸数	耕地面積	田	畑	樹園地	農業算出額	認定農業者
798 戸	469	328	70	71	90 千万円	55 人

### 主要農産物 (単位: ha)

	水稲	なす	胡瓜	里芋	伝統野菜	みかん	いちじく
河南町	173	15	8	9	298 a	25	6
(順位)		2	2	2	1		2
大阪府	6310	119	69	53	859 a	839	46

国の指定産地 (南河内郡東部地区)

さといも品種「石川早生」は河南町原産

なにわの伝統野菜: 認証制度に基づく認証面積 (H19.9 月現在)

## 【組織の概要】

### なにわ伝統野菜「白木ナス」の栽培グループが発展

農事組合法人「かなん」は、平成 16 年 4 月に道の駅オープンの同時期に発足、以来、道の駅内にある農産物直売所施設「河南町農業活性化センター」(以後、活性化センター)の管理運営を行っている。

河南町では農業振興、特に遊休農地解消のために、平成 10 年に府営事業「こごせ地区中山間地域総合整備事業」の採択を受け、ほ場整備を中心とした生産基盤整備を実施した。一方平成 12 年 12 月に国道 309 号の町有地に活性化センターが設置されることが決定。その後、道の駅を併設して整備することが決まった。

平成 14 年 4 月の河南町農業活性化センターの第二回準備総会で、客寄せと予行演習のために、毎週日曜日、仮設の直売所「ふれあい朝市」を開催することが決まり、5 月 26 日に第一回ふれあい朝市が開かれた。

ふれあい朝市は、パイプハウスの簡単な施設だったが、徐々に地域にも浸透し、町内のみならず、府内から来場者が集まるようになった。

### 「伝統野菜『白木ナス』を地元で食べたい」から朝市スタート

実はもともと河南町には 30 年近く前から JA が主催する朝市があった。

「きっかけは河南町の伝統野菜『白木ナス』だった」

「道の駅かなん」の駅長、坂上勝彦さんは話す。

「当時、町を挙げてナスの団地化を行った。そのため、河南の名物だった白木ナスが急速にすたれてしまった。団地化となると作りやすく、知名度のある品種が中心になる。地元のナスなのに、町の人さえ買えなくなってしまった。他の野菜も JA を通じて共販に出してしまうと、地元の人には買えない。そこで直売をしようと始まったのが朝市だった」。坂上さんは当時、JA の営農指導員だったため、そのあたりのいきさつにも詳しい。

そこで農村活性化センター構想が持ち上がった際、この朝市活動を発展させ、施設完成までの間、他品目生産や販売・PR の経験を積んでいくことにしたのである。



ふれあい朝市のような

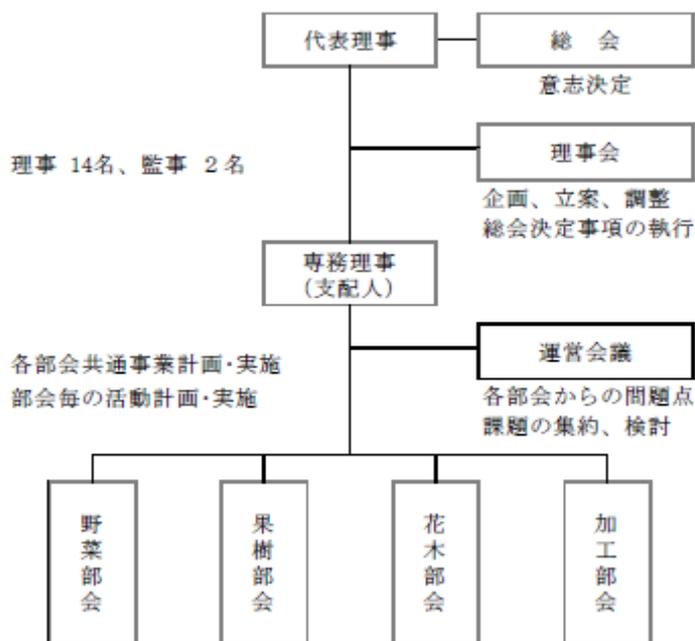
## 「施設は公設でも自主運営でない行き詰まる」

こうした経験の積み重ねるうちに、来場者数は回を重ねるごとに増加、知名度もアップしていった。会の有志からは、「施設は公設でも、行政や JA 主体の運営では、行き詰っているところが多い。地域みんなの施設なのだから、自主運営が欠かせない」という意見が強まっていった。

そこで、こだわり野菜の生産や、直売に関心のある農家が中心となり、町広報で広く組合員を募集、「河南ブランドを全国へ発信しよう」と呼びかけたところ、94人が集い、農事組合法人かなんを設立した。

現在の組合員は114人。理事は14人、監事2人。以下の図のような組織で、運営されている。特に力を入れている、それぞれの組合員の出荷計画＝事業計画＝や研修会は、野菜部会（77人）、花木部会（48人）、果樹部会（62人）、加工部会（19人）の各部会をごとに活動が行われている。

農事組合法人 かなん 組織・構成図



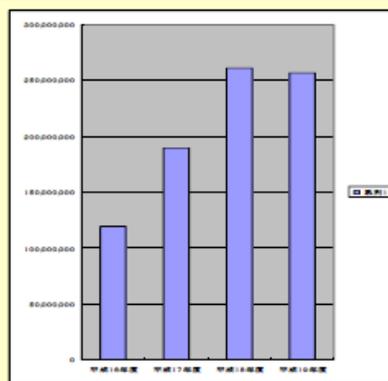
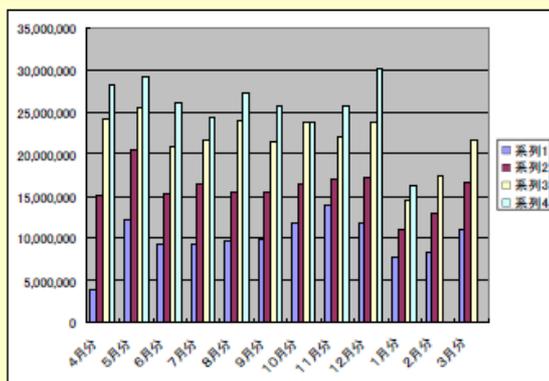
## 【活動の特徴】

### 地産地消・特産品づくりで顧客満足度アップ

組合員の努力が実り、農事組合法人「かなん」の売上は初年度の平成16年度には1億円を突破、1億2,000万円に達した。その後も、159.1%、137.6%と売上を伸ばし、平成19年には2億5,700万円となり、成熟期に入ったにもかかわらず、対前年比115.7%と成長を続けている。特に来客数は年間25万人を超えるほどになり、平成20年には開店以来の来客数が100万人を突破した。

#### ★実績(H20.1月末現在)

	客数	対前年比	販売点数	対前年比	販売金額	対前年比	対16年比
平成16年度	147,097		637,149		119,111,954		
平成17年度	208,320	141.6%	924,619	145.1%	189,534,814	159.1%	159.1%
平成18年度	268,972	129.1%	1,297,261	140.3%	260,875,536	137.6%	219.0%
平成19年度	256,782	112.2%	1,299,252	118.3%	256,500,696	115.7%	1月未現在
小計(累計)	881,171		4,158,281		826,023,000		



農事組合法人「かなん」のモットーは、地域住民や、観光客、そしてドライバーに親しまれる「ふれあい」の場の提供。組合員一丸となって、サービス向上に努めている姿が印象的だ。特に農産物の計画出荷、特産品の開発・育成、地場産にこだわる農産物加工品の開発・販売などにより「ここでしか買えないもの売る」ことを心がけた差別化戦略に成功している。

主な事業の柱は「農産物等販売部門」「農産物加工部門」「情報発信部門」の3本。それぞれ以下のような理念を掲げ、事業に励んでいる。

#### 【農産物販売部門】

##### 基本原則

1. 安全、安心、新鮮
2. 生産者と消費者の交流の場の提供
3. 朝どりを基本とした新鮮な農産物の出荷促進と品質の向上
4. 少量多品目栽培の促進。施設栽培や標高差を利用した出荷時期の拡大
5. 農産物の栽培履歴記帳の徹底

#### 【農産物加工部門】

- 1．品目ごとの販売量の把握、消費者ニーズに似合った製造の実施
- 2．消費者嗜好等の情報の収集、販売品の改善と品質向上
- 3．作業性を考慮した合理的な運営の確立
- 4．地域食材を利用した米粉パン等新たな農産加工品の開発

#### 【情報発信部門】

- 1．地域内施設等の紹介を目的とした道の駅システムの充実
- 2．地域内及び近隣地域でのイベント、催し、観光施設の案内拠点としての充実

### 「なにわ伝統野菜が買える直売所」を看板にマスコミ広報に成功

河南町で「なにわ伝統野菜」の復活に取組はじめたのは、平成8年のことだという。府の試験研究機関から、珍しい野菜があるから作ってみないかといわれた。当時、JAの営農指導員として相談を受けた坂上駅工は「正直、自分と仲間とで細々作っていたところ。実際、あまり売れなかった。小売店に置いてもらおうにも販路がなかった。正直、積極的に農家に勧めるのは難しかった」。しかし、地道に作り続けるうちに、居酒屋から漬物業者との契約栽培も行われはじめ、小さいながら生産者グループができてきた。

伝統野菜を育てるのには、手間がかかるという。通常の品種改良した野菜と違い、品質のそろいや、収量が劣る。気候変動にも病気にも弱く、管理作業に手間がかかる。かといって、市場に出しても極端な高値は期待できない。「むしろ、市場では評価が悪い」と坂上駅長は伝統野菜の生産販売の難しさを指摘する。

「農家の一番の楽しみは収量、次に単価。伝統野菜の毛馬胡瓜ひとつとっても、通常の収量の半分以下。畑を見てさびしいと思うのが農家の心情でしょう」

「特に毛馬胡瓜は手間がかかって、手間胡瓜と冗談口をたたく人がいるほどだ」。なにわ野菜生産出荷組合の谷川詔司会長、上條喜八郎さんは口をそろえる。

毛馬胡瓜は果長が30センチ、太さ3センチと大ぶり。黄色がかかった淡緑白色で、独特の苦味がある。曲がりやすいので、小さい時に花にボルトやナットを重しを吊り下げ、まっすぐにする。

比較的栽培しやすい、「田辺大根」は甘味と辛味のバランスがよいが、形は小ささまざま。市場では評価が低くなってしまう。

生産組合では総菜屋さんへの売り込みも図ったが、「価格競争が厳しくてとても、こだわり食材は使えない」と断られてしまった。

「結局、居酒屋など付加価値の高いところでしか販売できません。だからこそ、なにわ伝統野菜を守り伝えていくには、買う人の顔を見て、説明しながら販売していく、農産物直売所、道の駅の存在が貴重になる」と坂上さんは指摘する。

直売所にとっても販売戦略の要になっている。

「府を挙げてなにわ伝統野菜を宣伝しているが、『それなら、どこで買えるの?』という話になる。直売所のウリの一つとして『なにわの伝統野菜が買える直売所』という看板を掲げている」

これが当たった。

平成19年度に新聞、テレビ、ラジオ、雑誌などのマスコミに30回以上、取り上げられた。伝統野菜だけでなく、つながりのできたマスコミ関係者を中心に、いろいろなイベント情報を積極的に提供し、PRを心がけている。

「私たちのように宣伝費用をかけられない組織では、マスコミに取り上げてもらうことが一番の集客方法です。なにわの伝統野菜の看板は、そのために大活躍してくれています」  
直売所関係者は口をそろえる。



伝統野菜をPRする坂上駅長



「なにわの伝統野菜」毛馬胡瓜(右)

勝間南瓜(左下) 玉造黒門越瓜(左上)



「なにわの伝統野菜」の認証マークと)

### 「きめ細かい直売所型営農指導で出荷期間を伸ばす」

河南町は大阪市の近郊という立地に恵まれながら、海拔60メートル~400メートルという標高差があることである。このため、は種期をずらすことで、収穫・出荷時期をより長くすることができ、店の品ぞろえの充実につながっている。

たとえば、グリーンピースなどの豆類は、窒素を多めに施肥すると収穫が遅れる。

「最初はいつまでも実にならないので文句を言われましたが、結果として早く出した人の1.5倍で売れたときには感謝されました」と坂上さん。JAの営農指導員としての経験を存分に生かし、少量多品目生産を技術的にバックアップしている。

## 地産地消にこだわる加工品、米粉パンが人気

「道の駅かなん」のもう一つの看板商品が米粉パンである。

全国で米粉パンの開発・販売が盛んだが、「道の駅かなん」では、米だけでなく、具材も徹底的に地場産にこだわる。特に直売所の野菜を使った、和風惣菜パンが人気だ。

たとえば、「きんぴらごぼうパン」。甘辛の味ともっちりとしたパン生地が絶妙なコンビで人気商品だ。「野菜ならなんでも使える」と駅長のお勧めなのが「ピザパン」。チーズとピザソースに野菜がたっぷり「健康的」と評判だ。「やっぱり、米のせいか、和食と合う」とリピーターが増え続けている。

農産物加工部門のキーワードは「こだわり」。

1. 原材料を出来る限り地場産にこだわっての製造、販売
2. 季節毎の郷土行事に合わせた商品の製造、販売
3. 加工部員が交替で販売所にて、お客様と接しニーズを把握する

加工グループの母体になったのは、地元で活動してきた4地区の河南町生活改善グループ。平成13年度に、「河南町農産加工グループ」として結成された。道の駅構想が決定されると、大阪府南河内農と緑の総合事務所、農の普及課と協力して、試作品作りの年が経過を立て、月1回の定例会の実施や、グループ員全員が食品衛生責任者養成講習会を受講するなど、加工品販売に向けて活動してきた。

平成16年4月の道の駅オープンからは、加工部の所属するグループとして、もち、ジャム、菓子、漬物、味噌の5班に別れた活動している。

特に規格外の野菜の活用を力を入れている。大根をおでんや漬物にして加工販売するほか、地場の野菜を使用した「道の駅弁当」を販売している。弁当は土・日・祝日の60食限定で、中高年のドライブ客や、登山客を中心に人気が高く、店頭で並ぶと即完売という状況が続いている。



地場野菜がふんだんに使われている米粉パン



地産地消で人気の「道の駅弁当」

## ユリ、イチジクの生産“ルネサンス”をイベントに結びつけ

河南町は大阪府を代表する農業地帯で、古くからの野菜、果樹、花木の産地だった。しかし、農家の高齢化、後継者不足のため、多くの特産品が消えかかっていた。

農事組合法人「かなん」の設立は、こうした特産品のルネサンス、生産復興にもつながり、直売所の目玉商品として、品ぞろえの充実に貢献している。

たとえば、ユリ。河南町は元々、植木花木類の産地だった。特に町花が「ささゆり」で、栽培も簡単なことに注目し、平成 18 年からユリの栽培講習会や球根の共同購入を実施、ユリの栽培振興に取り組んでいる。6 月にはリリーフェスタを開き、連休後に落ち込みがちな集客の目玉にしている。

イチジクも同様。古くからの産地であるが、労働力不足から収穫する人が少なく、多くの果実を樹上で腐らせてしまっていた。平成 18 年度からイチジクの品評会を復活させ、「道の駅かなん」で開催した。イチジクまつり、即売会などの開催で、直売所の人気商品として定着。イチジクは特に鮮度が要求される上、L 玉以上の「プロのイチジク」の品質に人気が集まり、現在は品薄傾向にある。新たに作付けする人も現れ、生産量は増加している。



生産者の栽培意欲に火を付けた、いちじく展示品評会と、河南町産イチジク

## 安心・安全の証明としての栽培履歴記帳とエコ認証取得の取組

農薬使用に関するポジティブリスト制度の実施に伴い、「道の駅かなん」では平成 19 年 2 月からすべての農産物に対し農薬使用の履歴の記帳・提出、及び確認を行っている。販売の 1 週間前に防除日誌の確認を行い、それができない場合は、出荷できない。

大阪府では全国的なエコファーマーへの取組とは別に、大阪府独自の制度として、農薬・化学肥料の使用量を慣行栽培の半分以下にした、『大阪エコ農産物認証制度』があり、河南町でおエコ農産物の生産に取組み、平成 18 年度には述べ 22 人、18 品目、栽培面積 253a となっている。そのほとんどが「道の駅かなん」で販売されている。

### 防除日誌

作物名 <b>キャベツ</b>	栽培施設(場所)	生産者名	農への申告事項	平成19年(月)日(栽培日)	農薬(品名)	農薬(使用量)	農薬(使用回数)
栽培者(種苗会社)	栽培地番 (畝) × 長さ (m) × 高さ (m)	氏名		出稼予定日 ~ 終了予定日	品名		
作型	栽培日	定植日	収穫開始日	収穫終了日			

※ 農薬(除草剤を含む)を使用していない場合は、右欄に〇印を記入してください。

薬剤名	農薬(品名)	使用日1	使用日2	使用日3	使用日4	使用日5	使用日6
アブフォーム乳剤	1000倍	月 日	月 日	月 日	収穫7日前まで		
カッパースン水和剤	1000倍	月 日	月 日	月 日	月 日	収穫7日前まで	
ジェイエース粒剤	3g/株	月 日	月 日	月 日	収穫21日前まで		
セビアーフロアブル	1000倍	月 日	月 日	月 日	収穫9日前まで		
エビノース顆粒水剤	2500倍	月 日	月 日	月 日	収穫7日前まで		
ダユニール1000	1000倍	月 日	月 日	月 日	収穫14日前まで		
トアロー水和剤GT	500倍	月 日	月 日	月 日	月 日	収穫前日まで	
トイボン乳剤	1000倍	月 日	月 日	月 日	収穫7日前まで		
ネビタン粒剤	30g・10a	月 日	月 日	月 日	収穫又は定植前まで		
ペンレート水和剤	2000倍	月 日	月 日	月 日	月 日	収穫7日前まで (使用回数4回以内)	
薬剤名	農薬(品名)	使用日1	使用日2	使用日3	使用日4	使用日5	使用日6
		月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日
		月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日
		月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日
		月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日

注意: ①本表に記載のない農薬を使用した場合は、空白の欄に記入(粒剤・水和剤・乳剤・フロアブル・ドライフロアブル等の農薬まで忘れず)してください。そのときは、農薬(品名)や使用量に注意し、成分ごとの1作での総使用回数を超えないように注意してください。  
②農薬に使用した使用量・農薬(品名)が、本表に記載の使用量・農薬(品名)と異なる場合は、修正してください。

「防除日誌」と「大阪エコ農産物の認証マーク」(左)



## 毎月イベント、レシピ紹介で積極的に農産物の消費拡大・PR

農事組合法人「かなん」では、積極的にイベントを開催している。4月の創業祭に始まり、5月の植木、花まつり、6月のリリーフェスタ、8月のイチジクまつりなど、ほぼ、1月に1回以上のイベントをこなす。さらに、きJAFの交通安全キャンペーンの無料体験会など、協賛イベントへの参加も積極的に行い、PRに努めている。

視察、研修の受け入れにも積極的。「その時、買い物をしていただけるだけでなく、いろいろな情報を持ってきていただける貴重な体験」と考えるからだ(坂上駅長)。

「道の駅かなん」を情報発信基地として、位置づけており、特に農産物の消費拡大を通じたプロモーション活動に力を入れている。

府の農と緑の総合事務所農の普及課が事務局となる「み・な・さ・んネット(南河内産直ネット)」、南河内地区13の直外所のネットワーク組織の一員として積極的に活動している。

この産直ネットでは、「かんたん! レシピ」という料理パンフレット8種を作成し、消費者に配布している。店内では、こうしたレシピを利用したお勧め料理などが季節に合わせて紹介されている。

さらにネットワーク力を生かし、各直売所で生産量の多い、農産物の融通を行い、販売品目の充実や販売高の向上をはかっている。



消費者との交流イベントに力を入れている



南河内地区全体で人気の高いレシピ集

## 地域コミュニティ活動で人の和づくり

農事組合法人「かなん」が力を入れている活動の一つに地域コミュニティ活動がある。

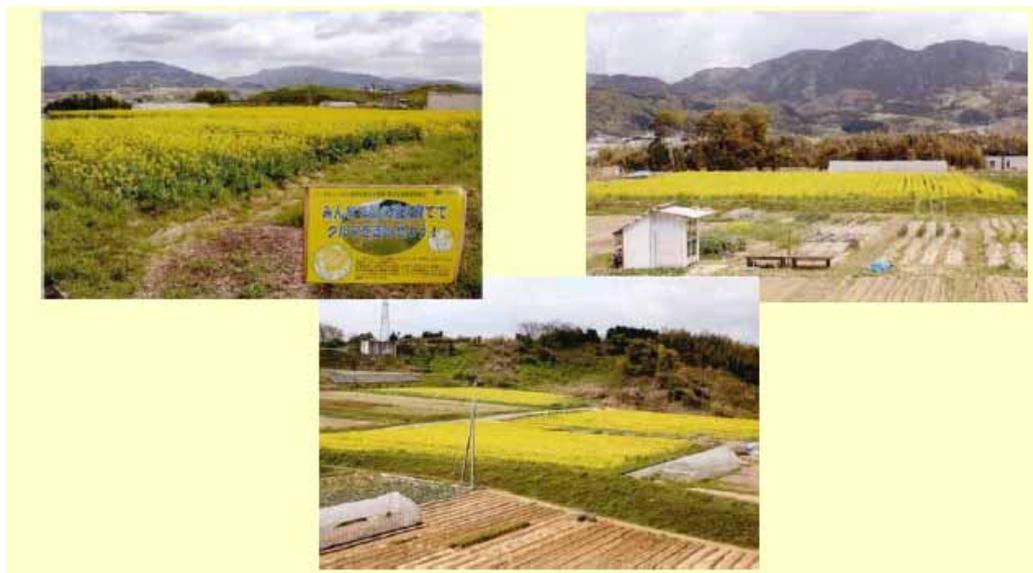
地産地消としては、なにわ伝統野菜生産組合のメンバーを中心に約20年にわたり学校給食への地場産農産物の提供や、農業体験を行っている。

「ふれあい農園」「楽習農園」「研修農場」なども教育ファームや、新規就農者の受け入れ事業などとも積極的に連携を図っている。

町内及び大阪市内の学校・幼稚園等の子供たちとPTA参加による収穫祭も積極的に行っている。

里山倶楽部NPO法人などの環境団体とも共同事業を行い、消費者とともに地域づくりを考えてきた。

また、菜種によるバイオディーゼルの実験などにも積極的に取り組んでいる。



菜の種によるバイオディーゼル燃料プロジェクトのほ場

#### 【活動の成果】

##### 「少量他品目」身の丈に合った地域農業の提唱

年商2億6,000万円の産業の創出は、農村地域にとっては画期的な成果である。

しかし、農事組合法人「かなん」の最大の功績は、「道の駅かなん」の設置を契機に、かつての「大阪の台所」と呼ばれた野菜産地、果樹産地を、「少量他品目生産」に象徴される身の丈に合った地域農業としてよみがえらせたことにある。農業者の高齢化が進み、後継者不足で農業生産力が低下するという、時代の流れを跳ね返して見せたことである。「できることをやる」という方針が、多くの生産者に支持され、地域農業の活力を回復させた。

地域では定年退職者を中心に新たに、農業を営む人が20人出てきている。若手の後継者も1人いる。遊休農地も減少傾向に転じた。

#### 【将来の抱負】

##### 「生産者が自ら販売する直売所」の誇りを持ち続け

平成19年6月に都市部により近い羽曳野市に大規模なJA直営の農産物直売所がオープンした。オープンに伴い、「道の駅かなん」の来場者が減少するのではないかと心配された。しかし、来場者は、前年比約1割増加している。

久門組合長は、「これからも、あくまでも河南町産農産物にこだわり『生産者が自ら販売

する』直売所としての誇りを持って事業を進めていきたい」と力強く話す。

さらに「食べておいしい、いいものを安く」をモットーに、日常消費品と同時に、土産物、盆暮れのお遣い物になる高級品の2ジャンルを明確に分けながら、商品開発、生産販売に取り組んでいくという。



「道の駅かなん」店内のようす